

平成三十一年度

問題冊子

国 語	教 科
	科
国 語	目
13	ページ数

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
3. 試験終了時には、解答用紙の1ページ目を表にし、机上に置くこと。
4. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

[1] 次の文章は、人種差別や移民排斥などの排外主義的な運動について論じたものである。これを読み、後の問いに答えよ。

^(注1) 国民国家の形成プロセスは、民衆にとつて、軍役を強要されるということだけではおさまらない「ポジティブな側面」^①をも含んでいたということには注意しておこう。

たとえば、国民化をつうじて民衆は、国家の決定過程に建前的にせよ参加することができるようになり、場合によっては国家機構の役職につくこともできるようになった。また、たんに富を徴収されるだけでなく、国家の成員として生存の保障をある程度は国家からうけられるようになった。そしてなによりも、国家の実力行使の主体となることで、国家がもちいる暴力に正面から対峙^せさせられる必要がなくなった。国家の物理的実力にたいする全面的なフクジュウ^②か、死をかけた反抗か、という二択状態からの脱出である。

要するに、国民となつた民衆は、もはや受動的な被支配者であることをやめ、国家がつくるセキュリティをみずからのもとして「あてにすることができるようになつたのである。くりかえせば、ここでいうセキュリティとは、たんに治安という意味でのセキュリティだけでなく、不慮の事態にたいする生活の保障という意味でのセキュリティでもある。

また他方では、国家のほうも、国民的な形態へと生成することで、多くの民衆をみずからの実力行使へと動員することができるようになつた。これは、国家の物理的実力を増強させるという効果をもつだけでなく、内戦のリスクを大幅に減らす。民衆の大部分が国民として国家の側につくことで、国家による合法的暴力の独占はより安定化するからだ。国家はもはや民衆を支配するためにかれらと対立する必要がない。フーコーがコレージュ・ド・フランスでの講義でのべたように、国家は「社会そのものを防衛する」ようになることで、「社会からみずからを防衛する」ことをしなくてもよくなるのだ。^(注2)

国家の国民化のプロセスとは、暴力にもとづいた支配が——フーコーなら規律権力や生・権力とよぶような権力のあり方とむすびつくことで——^②ますます不可視に、「穏和」^③になっていくプロセスであつた(残酷で見世物的な身体刑がなされなくなったのはそのためだ)。民衆たちが国家と一種の「セキュリティ協定」をむすぶことができるようになったのは、まさにこうしたプロセ

スにおいてである(ただし、このようなセキュリティ上の「利点」はあくまでも国民として同定された民衆にとつてのものであり、国内のマイノリティや、その国家によって侵略された地域の民衆は、国家と民衆の一体化そのものがひきおこす残酷さの犠牲となった)。

① 現代のポピュリズムが体现しているのは、国家と民衆のあいだに歴史的にむすばれてきたセキュリティの絆を、民衆の側からシメ直そうとする運動にほかならない。しかしじつは、こうした民衆からの要求したい、国家がもはや国民的なものではなくなりつつあることのひとつのあらわれだ。国家はいまや、国民全体の生存条件をめぐるセキュリティの保障にますます無関心になつてゐる。

二つの大きな要因があるだろう。

一つは、国家の物理的実力をささえるテクノロジのさらなる発達である。軍事装置の超ハイテク化は、国家の軍事行動のために国民全体が動員される必要性をなくしてしまつた。ますます加速するEU諸国のあいだの軍事統合が示しているのは、国民という単位で担うには現在の軍事テクノロジはあまりに高度で強大である、ということにほかならない。

この点で、近代徴兵制をつくりだしたフランスで二〇〇一年に徴兵制が廃止されたのは象徴的な出来事である(議会で可決されたのは一九九七年)。徴兵制でおこなわれていたのは武器の扱い方の習得だけではない。識字率の検査や、基礎科目の再教育、規律をつうじた生活習慣の改善、といった「生活の面倒」も同時になされていた。徴兵制はコストがかかるわりには、現在のハイテク軍事がヨウセイする②ような兵士を育成できない。

また二つ目の要因として、国家が徴収すべき富が生産される様態の変化がある。経済活動のグローバル化と抽象化は、領土内における民衆全体を質のよい労働者へと育成しながら生産性を向上させるというやり方を無効にしつつある。工場は経費の安い国外へと移転し、領土内には労働者をつかう場は減少している。いまや富の徴収にとつて重要なのは、自国にある企業の指揮本部と国外の生産拠点、そして市場をつなぐネットワークを防衛することであり、また、浮動性のたかい金融資産が国外へと流出しないよう資本所得にたいしては減税をしながら、流動性のひくい民衆の生活にかかわる福祉的な税制上の配慮(いわゆる再分配政策)をなくしていくことである。

国家はいまや、軍事的にも経済的にも、国民という形態に依拠する必要性から脱しつつあるのだ。国家にとって、領土内における住民全体の生存条件を整えることは、見返りのすくない非効率的な作業となりつつあるのである(念のためにいえば、国家が国民的なものではなくなりつつあるからといって、フランスやイタリアといった現在の国家の単位がただちに消滅するわけではない。国民的なものではなくとも国家は存続する。問題はあくまでも国家形態の変容である)③。

ポピュリズムによる「国家への呼びかけ」は、現在の国家の脱国民化にたいするひとつの反作用にほかならない。その運動をうみだしている不安感、国民国家のもとでむすばれていた民衆と国家のセキュリティ上の絆がほころびつつあることに起因している。そのほころびをむすび直そうとして、ポピュリズムは、国民であるための核となる人種的アイデンティティへとますます傾斜しているのだ。

「ほころびをむすび直す」という意味では、ポピュリズムは、過去のものとなりつつある国民国家へのノスタルジーにみちた運動であるだろう。それは、こんにちのグローバル化した社会をまえに「零落しつつある小市民」がおこす既得権の防衛要求である。

しかし、その防衛要求が人種的アイデンティティをつうじてなされるという点では、ポピュリズムはたんなる回顧的で後ろ向きな運動にはとどまっていない。それは、国民的なものから離陸しつつある国家にたいして構成的な役割を果たしてもいるのだ。

脱国民化しつつある国家にとって、領土内の住民全体というものはや特権的な準拠枠ではない。つまりそこでは防衛すべき社会空間が領土的な空間と一致しなくなっているのだ。自国にある多国籍企業の指揮本部と国外の生産拠点をむすぶネットワークもその一例である。ポピュリズムは、セキュリティの問題を人種的アイデンティティのシエーマとむすびつけることで、国家が領土的な枠組みに準拠せずに暴力を組織し実行する可能性をひらく。そこで表明される人種主義は、道徳や信仰、勤勉さ、犯罪へのシワ性^④といったものをおもな基準とする文化主義的なレイシズムである。^⑤

ポピュリズムの要求は、国家が領土的枠組みをこえてセキュリティを追求することを加速させる。この点では、ポピュリズムは脱国民化する国家と共犯関係にあるのだ。

④ ポピュリズムのこうした両義性は、ナショナリズムが国民国家のあとにどのように生き残っていくのか、ということをおれわれに教えるだろう。

こんにちのポピュリズムが国民国家をみずからの要求のモデルにしていることはすでに見た。特定のアイデンティティをもつた民衆が国家の主体となるべきだと主張する点で、ポピュリズムはナショナリズムと連続的な関係にある。しかし同時に、ポピュリズムはナショナルな要求を貫徹しようとすればするほど、人種的なアイデンティティにアクセントを置かざるをえない。これは、民衆が国民へと生成する過程でうけとってきたさまざまな「利点」が現在では消滅しつつあることに起因している。つまり、国民的な連帯や扶助を可能にした諸制度が機能しなくなつたところでなされるナショナルな要求は、人種主義的な性格を強めていくのだ。

ナショナリズムは、「出自・生まれ」をアイデンティティの根幹におきながらそのアイデンティティをもたない人びとを非ノーマル化しようとする点で、もともとレイシズムと内在的な関係をもっている。国民国家に制度的に立脚できなくなつたナショナリズムは、そのレイシズムの契機を活性化させることで、国民形態が機能不全になつたあとにも延命してゆくのだ。

脱国民化していく国家が——逆説的にも——ナショナリズムを利用しうる根拠がここにある。ナショナリズムは、国家が国民的なものを特権的な参照項にしなくなつたからといって、ただちに退場するわけではない。国民へのノスタルジーにみちたポピュリズムが、それでもなお新たな国家形態の変容において構成的な役割を果たす地点、それが（人種主義化した）ナショナリズムの活動の場だ。国家は、社会保障や税の再分配といった国民的な諸制度がもたらす「あしかせ」をとり払うためにすら、ナショナリズムを利用する。

だから、国民国家を批判することでナショナリズムをも同時に批判できると考える大雑把な発想はもうやめなくてはならない。国民国家とナショナリズムは相互に依存的な関係にあるとはいへ、両者の外延はおなじではない。国民国家は国家の一形態にかかわるのにたいし、ナショナリズムはアイデンティティのシエーマにかかわっている。

重要なのは、いまや国民形態から離脱しつつある国家が、そこからなにをケイシヨウし、なにを捨て、なにを利用しようとしているかを見定めることだ。そして、その国家が新たにどのような仕方で物理的実力をたくわえ、行使していくのかを見極めることである。

(本文は、青土社刊の萱野稔人『権力の読み方 状況と理論』に拠る。なお設問の都合上、本文を変更した部分がある。)

〈注〉

- 1 国民国家―様々な民衆を「国民」という構成員として統合することによって成立する国家。
- 2 規律権力や生・権力―フーコーの提唱した概念。人々の生を積極的に管理し方向付けようとする権力を「生・権力」と呼び、具体的には、学校や軍隊などで人々の身体を規律正しく従順なものに調教しようとすることを「規律権力」と見なした。
- 3 ポピュリズム―一般大衆の欲望や願望の支持のもと、エリート的な政治体制や知識人に対決しようとする政治的姿勢。著者は、ヨーロッパの排外主義をポピュリズムによって引き起こされたものと見ている。
- 4 シェーマ―観念を成り立たせるための図式、枠組み。
- 5 レイズム―人種主義。

問一 傍線部⑦と⑧のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①とあるが、「ポジティブな」側面とは、民衆にとって何であったか。具体的にまとめよ。

問三 傍線部②とあるが、なぜそう言えるのか、説明せよ。

問四 傍線部③とあるが、著者はどのような「変容」をみているのか、簡潔に説明せよ。

問五 傍線部④とあるが、この「両義性」とはどのようなものか、説明せよ。

〔2〕

次の文章は、大正二年に発表された田村俊子「木乃伊の口紅」の一節である。主人公みのもと義男は、共に小説家を志しているが、極度の貧困にあえぎ、喧嘩の絶えない夫婦であった。そんな中、義男の勧めでみのもとは小説を懸賞に応募した。これを読み、後の問いに答えよ。

この女と離れさえすれば、一度失った文界の仕事ももう一度得られるような気もした。みのもとが自分の腕に纏繞まつわっているのに、大胆に世間を踏み躪むれないという事が自分に禍わざわいをしているのだと思うと、義男はこの女を追い出すようにしても別にならなければならぬと思ひ詰める事があった。

「何か仕事を見付けて僕を助けてくれる訳にはいかないかね。」

義男は毎日の様にこれをくり返した。

遂ついにに男の手から捨てられる時が来たともみのもとは意識していた。

十何年の間、みのもとは唯ある一とつを求めるために殆ほとんど憧れ尽した。何か知らず自分の眼の前から遠い空との間に一とつ①の光るものがあつて、その光りがいつもみをとるの心を手操②り寄せようとしては希望の色を柵引かして見せた。けれどもその光りは、なかなかみのもとの上に火の輝きとなつて落ちてこなかつた。みのもとは義男の心の影を通して、自分にばかり意地の悪い人生をしみじみと眺めた。

「何も彼も思い切つてしまいたまえ。君には運がないんだから。そうして君はあんまり意気地がなさ過ぎる。君は平凡な生活に甘んじて行かなければならぬ様に生れ付いてるんだ。」

斯こういう義男の言葉をみのもとは思い出した。けれども、みのもとは矢つ張りその一縷ひとの光りをいつまでも追つていたかつた。遂①に自分の手に落ちないものと定きままつていても、生涯その一縷の光りを追い詰めていたかつた。然そうしてその追い詰めつつゆく間に矢張り自分の生の意味を含ませて見たかつた。

二人はある晩西（注）の市から帰って来てから、別れるということを目に話し合った。

「第一君にも気の毒だ。僕の働きなんてものは、普通の男の以下なんだから。僕はたしかに君一人養う力もないんだから一時的になつてくれたまえ。その代り君を贅ぜいたく沢に過ごさせせる事が出来る様になつたら又一所になつてもいい。」

これが別れると定まつた時の義男の言葉であつた。

「義男と離れたなら自分は何うしよう。何うして行こう。」

みのるは直ぐに斯う思つた。そうして自分の傍から急に道連れの影を失うのが、心細くて堪らなかつた。今まで長く凭もたれて自分の肌の温みを持った柱から、沁すり落されるような頼りなさが、みのるの心を容易に定まらせなかつた。

「メエイとも別れるんだわね。」

みのるは庭で遊んでいた小犬を見ながら斯う云つた。この小犬は二人の長い月日を叙景的に繋つなぎ合せる深い因縁をもつていた。二人をよく慰なぐさめたものはこの小犬であつた。みのるは思わず涙がこぼれた。

「あなたに別れるよりもメエイに別れる方が悲しい。妙だわね。」

みのるは戯談じやうだんらしい口吻くちふんを見せてから、いつまでも泣いていた。

みのるは一旦母親の手許へ帰る事になつた。義男はあるだけの物を売り払つて一時下宿屋生活をする事に定めてしまつた。

ここまで引つ張つて来てから、ふとこの二人を擲から擲かうような運命の手が思いがけない幸福をすとんと二人の頭上に落してきつた。それは、この夏の始めに義男が無理に書かしたみのるの原稿が、選の上で当つたのであつた。

それは、十一月の半ばであつた。外は晴れていた。みのるが朝の台所の用事を為している時に、この幸福の知らせをもたらした人が来た。

その人は二階でみのるに話をした。その人が帰つてしまつてから二人は奥の座敷で少時しばらく顔を見合せながら坐つていた。

「本当にあつたのかしら。」

義男は力のない調子で斯う云った。

みのるの手に百円の紙幣が十枚載せられたのはそれから五日と経たないうちであった。二人の上に癌腫の様に祟つていた経済の苦しみが初めてこれで救われた。

「誰の為た事でもない僕のお蔭だよ。僕があの時どんなに怒つたか覚えているだろう。君がとうとういう事を聞かなければこんな幸福は来やしないんだ。」

義男自身がみのるに幸福を与えたかのように義男は云い聞かせた。

「誰のお蔭でもない。」

みのるも全く然うだと思つた。みのるはある時義男が生活を愛する事を知らないと思つて怒つた時、みのる自身は自分の芸術の愛護の爲めにこれを泣き悲んだりした。そんな事に自分の筆を荒ませるくらいなら、もつと他の筆の仕事で金銭という事を考へて見る、とさえ思つた。

けれども義男に鞭打たれながらああして書き上げた仕事、こんな好い結果を作つた事を思うと、みのるは義男に感謝せずにはいられなかつた。

「全くあなたのお蔭だわ。」

みのるは然う云つた。この結果が自分にひとつの新規の途を開いてくれる発端になるかも知れないと思うと、みのるは生れ変つた様な喜びを感じた。

「これで別れなくとも済むんだわね。」

「それどころじゃない。これから君も僕も一生懸命に働くんだ。」

(本文は原則として、『木乃伊の口紅・破壊する前』講談社文芸文庫に拠る。)

〔注〕 西の市—十一月の西の日に、鷲神社で行う祭り。

問一 傍線部㉞㉟の漢字の読みを平仮名で書け。

問二 傍線部①「然^そうしてその追い詰めつつゆく間に矢張り自分の生の意味を含ませて見たかった。」とあるが、主人公はどのような希望を持っているのか。わかりやすく説明せよ。

問三 傍線部②「二人の長い月日を叙景的に繋ぎ^{つな}合わせる」とはどういうことか。簡潔に説明せよ。

問四 傍線部③「生活を愛することを知らない」とあるが、義男はみのあるをどのような点で非難しているのか。わかりやすく説明せよ。

[3] 次の一連の歌は、都から大宰府に赴任した人々が、宴に集った折の歌と察せられる。これらの歌を読んで、後の問いに答えよ。

大宰少貳小野老朝臣が歌一首

あをによし 奈良の都は 咲く花の ① にほふがごとく 今盛りなり

防人司佑大伴四綱が歌二首

やすみしし ② 我が大君の 敷きませる 国の中には 都し思ほゆ
藤波の 花は盛りに なりにけり ③ 奈良の都を 思ほすや君

帥大伴卿が歌五首

我が盛り またをちめやも ④ ほとほとに 奈良の都を 見ずかなりなむ
我が命も 常にあらぬか 昔見し ⑤ 象の小川を ⑥ 行きて見むため
浅茅原 つばらつばらに ⑦ もの思へば 古りにし里し ⑧ 思ほゆるかも
忘れ草 我が紐に付く ⑨ 香具山の 古りにし里を 忘れむがため
我が行きは 久にはあらし ⑩ 夢のわだ ⑪ 瀬にはならずて ⑫ 淵にしありこそ

④ 沙弥満誓、綿を詠む歌一首

④ しらぬひ 筑紫の綿は 身に付けて いまだは着ねど ⑬ 暖けく見ゆ

⑤ 山上憶良臣、宴を罷る歌一首

憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つらむぞ

(『万葉集』)

- 〔注〕 1 をち―動詞「をつ」。若返るの意。 2 象の小川―奈良県吉野にある川の名。 3 つばらつばらに―つらつらと。 4 香具山―明日香にある大和三山の一つ。 5 夢のわだ―奈良県吉野の宮滝にある淵の名。

問一 傍線部①、②の意味を記せ。

問二 傍線部③、④の「し」を二つのグループに分類し、分類した理由を文法的に説明せよ。

問三 傍線部③「奈良の都を 思ほすや君」に対して、帥大伴卿はどのように答え、さらに、どのように自らの心情を歌いついでいるか。帥大伴卿の歌の流れに沿って、わかりやすく説明せよ。

問四 傍線部④。沙弥満誓の歌は、一連の歌の中でどのような働きをしていると考えられるか。「筑紫」とあることに注意して答えよ。

問五 傍線部⑤。山上憶良の作として『万葉集』に収められている歌には、他にどのような歌があるか。その題名を一つ挙げよ。

〔4〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の都合で、返り点・送り仮名を省いたところがある。)

堯^テ以^テ天下^ヲ讓^ル於^テ子州支父^ニ。子州支父^ハ對^シ曰^ク、「以^テ我^ヲ為^ス天子^ト猶^ホ可^シ也。」

雖^レ然^①、我^タ適^マ有^リ幽憂^ニ之病^②。方^マ將^ニ治^メ之^ヲ。未^ダ暇^{アラ}在^ニ天下^ニ也^①。天下^ヲ重^シ

物也。而不^レ以^テ害^ス其生^ヲ。又況^テ於^テ它物^ニ乎。惟^タ不^レ以^テ天下^ヲ害^ス其生^ヲ者也、

可^シ以^テ託^ス天下^ヲ。越人三世殺^ス其君^ヲ。王子搜患^レ之^ヲ、逃^ル乎丹穴^ニ。越国無^ク

君、求^ム王子搜^ヲ而不得[、]從^フ之^ニ丹穴^ニ。王子搜不^レ肯^ニ出^ル。越人薰^レ之^ヲ以^テ

艾^ヲ、乘^レ之以^テ王輿^ヲ。王子搜援^レ綏^ヲ登^リ車^ニ、仰^ギ天^ヲ而呼^ビ曰^ク、「君乎。独^リ不^レ可^シ

以^テ舍^ク我^ヲ乎。」王子搜非^シ惡^シ為^ス君也。惡^シ為^ス君之患也。若^シ王子搜^ノ者、

可^シ謂^フ不^レ以^テ国^ヲ傷^ム其生^ヲ矣。此固^シ越人之所欲^ス得^テ而為^ス君也。

〔呂氏春秋〕

〔注〕 1 子州支父―伝説上の賢人。 2 幽憂之病―物思いに沈む病。 3 王子搜―越国の王子。

4 丹穴―洞窟の名。 5 綏―車に乗る時につかまる綱。 6 呼―叫ぶ。 7 舎―捨てておく。

問一 傍線部④、⑤の読みを、送り仮名を含めて、すべて平仮名で記せ。なお現代仮名遣いで構わない。

問二 傍線部①を、適切な言葉を補いつつ、わかりやすく口語訳せよ。その際、「其」と「它物」の内容をはっきりさせること。なお「它」は「他」の意である。

問三 傍線部②を書き下せ。

問四 この文章では、王子搜が君主にふさわしい理由をどのように考えているか、説明せよ。

問五 この文章に見られる考え方に最も近い分類を、次のア～カのうちから一つ選べ。

ア 儒家 イ 道家 ウ 法家 エ 名家 オ 墨家 カ 縦横家